

舍密開宗

十七

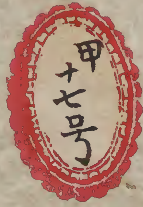
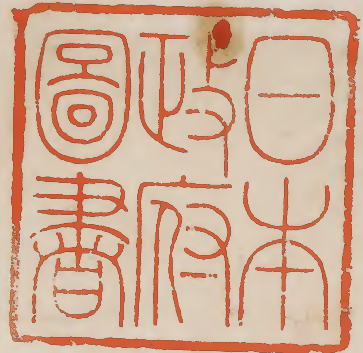
化學  
15

庫文閣内		
内閣文庫		
番號	和	30295
冊數	19 (15)	
函號	197	268

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

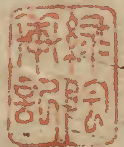






七三四九

明治十七年購求



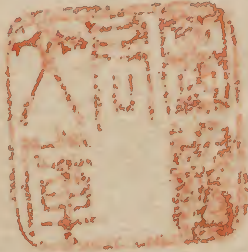
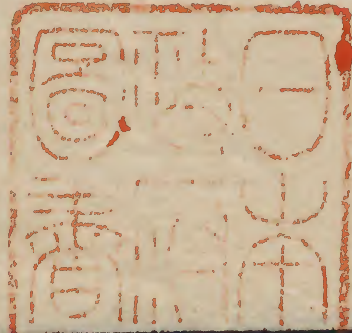
舍密開宗内篇卷十七

宇田川榕榕菴 重譯増註

酒酸第二百七十五章

アシズム、タルタリキム、全酒酸、サル、ホセ、ン、チ、ア  
レ、アシズム、タルタリ、キム、全酒酸、サル、ホセ、ン、チ、ア  
名物考ニ所謂酒石酸、  
名物考ニ所謂酒石酸、

酒石羅謨<sup>ロ</sup>按<sup>ニ</sup>精製<sup>シ</sup>ヲ沸湯ニ溶シ炭酸加爾基ヲ加テ沸  
滓歇ニ至レバ沈渣ヲ生ス即チ酒酸加爾基ナリ之ヲ  
水洗シテ稀硫酸ヲ注ゲバ硫酸加爾基ハ沈ミ酒酸ハ  
分テ澄中ニ在リ澄ヲ蒸散メ冷セバ端正ノ晶ヲ結ブ



舍密開宗 卷十七



○按ニ此悉肱列ノ法ナリ加爾基一分ハ酒石末四分ヲ以テ沸滓歇ミ酒石二比ヲ以テ生スル酒酸加爾基ハ硫酸ハ弓或ハ十弓ヲ以テ分離シ酸晶十一弓ヲ得ベシト云

蘓氏舍密云酒酸ハ一種ノ植酸ニノ加里ニ和ノ酒石ヲ成ス一ハ麻爾苦瓦刺弗ニ創テ其來ルヲ邀ナリ其酸ヲ分ツ法ハ悉肱列ニ初レリ○大抵加里ニ和ノ基ミノ果實殊ニ成熟ノ葡萄ニ多シ答末林度ニハ加里ニ和セザル游離ノ酒酸アリ○悉肱列ノ製法ハ湖海名哲ノ稱用スル所ニメ良法タリト雖

モ猶左ニ別ノ二法ヲ記ス

○第一法ハ酒石一分ニ炭酸加里ヲ飽和シ生石灰八分ヲ加テ半時ノ間煮レバ拔塞斯性ノ酒酸加爾基ヲ降ス之ヲ淋洗シテ硫酸ヲ以テ分離シ酒酸ヲ得ベシ○酒酸加爾基ヲ降シタル澄ハ精好ノ苛性加里ナク貯テ用ベシ

○第二法ハ硫酸一分水三分ノ劑ヲ煮沸シ酒石ヲ取テ少ク過分ニ和スレバ酒酸分ル剩液ハ酒酸ト酸性酒酸加里ヲ雜物ヲリ濃煎メ亞爾箇兒ヲ和スレバ酒酸ハ溶ケ酒酸加里ハ溶ケズ



酒酸性質第二百七十六章

酒酸ハ水ニ容易ク亞爾加里ニ和シ易シ加里ニ飽和  
ノ鹽ヲ爲ス者モ能ク水ニ溶ケ飽和ヲ過ル者ハ二十  
倍ノ水ヲ須テ溶ク酒石羅謨ハ如シ之ニ加里ヲ加テ  
其過酸ヲ飽和スレバ方纔テ能ク水ニ溶ク

○蘓氏舍密云酒酸ハ一舉ニ多ク製スレバ玲瓏瑩  
白ノ六面柱ヲ結ヒ少シ製スレバ端晶ヲ得難シ氣  
ニ中テ變セス酸味清美ニ烈シ二百五十度ノ熱  
ニ遇バ結晶水ヲ連テ烱ケ冷レバ凝テ光芒狀ノ晶  
塊ヲ爲ス此以上ノ熱度ニテハ分離ス○他ノ稟性

ハ拘酸ニ大ニ似テ少ク異ナリ獨別列乙涅爾曰發  
煙硫酸ヲ注テ煮レバ分離ノ水ト酸化炭ヲ生ス稀  
硫酸ト酸化滿俺ニ由テ蟻酸ト爲リ消酸ヲ加レバ  
稼酸ト爲ル○水分ナキ者ノ亞量ハ七十四ニ等ク  
水一亞ヲ含ム者ハ八十三ニ等シ水分無キ者ノ成  
分ハ炭素四亞水素二亞酸素六亞  
酒酸鹽ラタルト中鹽ニ一倍量ノ酸ヲ含メバ酸鹽ト  
爲ル溶ケ難キ中鹽酸鹽ト爲レバ容易シ

酒酸加里タルトラス、ポト、カ、リ、タル  
ス孕鹼酒石タルトラス、ポト、カ、リ、タル  
タルタルトラス、ポト、カ、リ、タル  
ス、ソ、ム、ビ、リ、ス、和、蘭、所、呼、



酒酸ノ中鹽ナリ製法。加里ヲ水五六分ニ煮溶シ滾沸ニ乗ノ酒石細末少許宛ヲ加テ沸滓歇ニ其液勒佉母斯紙ヲ紅變セズ薑黃紙ヲ變ゼザルニ至リテ漉過シ或ハ煎乾シ或ハ結晶シ緊口壘子ニ貯フ○此ハ結晶シガタシト雖モ多分ニ製スレバ晶ヲ爲ス氣濕ヲ引テ潮解ス○薄弱ノ酸精ト雖モ此ニ和スレバ常ノ酒石ニ變ス故ニ醫家此鹽ヲ配スル方劑ト答末林度醋。蜂蜜等ノ酸物ト併セ用フ勿レ

酸性酒酸加里 ペビタルトラス、ポトス、シキス、タルトラス、ポトス、サ、タルタリ酒石

羅謨酒石 ゲソイフルデ、左インステール、精製

葡萄酒ヲ醸ス桶中ニ自ラ結生ス但シ土分粘液。色分等ヲ雜テ精好ナラザルニ由テ古ハ之ヲ再ヒ水ニ煮溶シ湯面ニ漚ム鹽膜 羅謨トヲ抄ヒ取ル故ニ

酒石羅謨ノ名アリ

酒酸曹達 タルトラス 方柱或ハ針ヲ爲ス氣ニ變ゼズ温レバ粉化ス水ハ八分。湯ハ二分不及ニ溶ク亞爾箇兒ニ溶ケズ○酸過大ナレバ酸鹽ヲ爲ヌ酒酸加里ノ如シ味酸ノ稍鹹シ晶形ハ製法ノ異同。放冷ノ遲速ニ從テ定無



酒酸諸摸尼亞タルトラス、アムモニトラス

方柱晶ニノ味消石ニ類シ氣ニ中レバ諸摸尼亞飛

散ノ風化ス水ニ容易シ○酸鹽ピタルトラス、アモモニトラスハ水

ニ溶ガタシ○中鹽ハ瑞國ノ醫家其溶液ニ琥珀油

ヲ和メ治病ノ効ヲ稱ス

酒酸重上レタルトラス、バ

細粉ナリ殆ト水ニ溶カズ○酸鹽ハ能ク溶ク

酒酸斯多倫土タルトラス、トロトラス

前種ト同シ但稍容易シ

酒酸加爾基タルトラス、カルシトラス

製法。酒酸ノ章ニ出○白粉ニノ水六百分ヲ須テ方

ニ溶ク自然ニ葡萄汁ニ有リ故ニ酒石モ此鹽百分

ノ一若バ一半ヲ含メリ煨ケバ焔解セズノ二十倍

ニ膨脹ス○酸鹽ピタルトラス、カルシトラスハ容易シト雖モ端

正ノ晶ヲ結バズ○拔塞斯鹽ハ溶ガタシ製法ハ酒

酸別製法ノ第一法ニ見タリ

酒酸苦土グタルトラス、マ

水ニ溶ケズ○酸鹽ハ漸次ニ煮レバ六面針ヲ爲ス

酒酸礬土タルトラス、アムモニトラス

護謨ノ如シ氣ニ潮ラズ容易シ



酒酸亞酸化滿俺タルトラス、マ

酒酸加里液ニ鹽酸滿俺スガノヒス、マ液ヲ和スレバ初

メ酒石少許沈ミ放冷シ後細白晶ヲ結ブ即此鹽ナ

リ之ヲ沸湯ニ溶セバ不可溶拔塞斯鹽ト可溶酸鹽

ト分レ生ズ

酒酸亞酸化鎂タルトラス、

酒酸ニ硫酸亞酸化鎂液ヲ温メ和スレバ放冷ノ後

葉片晶ヲ結ブ水ニ少シ溶ク○鎂屑ヲ酒酸ニ溶セ

バ白粉ヲ生ス此粉ハ結晶水零一三ヲ含ミ水ハ四

百二十六分湯ハ四百零二分ニ溶ク或濡リ或ハ氣

ニ中レバ更ニ酸化ノ此鹽ト爲ル

酒酸全酸化鎂タルトラス、

晶ヲ結バズ暗赭色ニシテ容易シ

酒酸格拔爾多タルトラス、コ

紅色玲瓏ノ晶ナリ容易シ

酒酸亞鉛タルトラス、

白粉ナリ水亞爾箇兒ニ溶テズ

酒酸嘉度密烏母タルトラス、

纖細柔軟ノ針ヲ爲ス水ニ溶ガタシ

酒酸鉛タルトラス、



白粉ニノ晶水無シ熾熱スレバ即チ分離ノ炭酸水  
焦酒石油ヲ生ス

酒酸亞酸化錫タルトラス、ス  
ンノヒス

錫液ヲ酒酸ニ和スレバ水素瓦斯ヲ發メ小針晶ト  
爲テ生ズ水ニ溶ケズ

酒酸全酸化銅タルトラス、  
キプリキス

全酸化銅液ヲ酒酸ニ和シ煮レバ暗青緑晶ヲ結フ  
溶ケ易シ此液ニ酒酸ヲ點添スレバ溶ガタキ青白  
粉狀ノ酸鹽ト爲ル

酒酸亞酸化瀕タルトラス、ヘイ  
ド  
ルゲロヒス

消酸亞酸化瀕ニ酒酸加里ヲ和スレバ複親和ヲ以  
テ此鹽細キ鱗屑ト爲テ沈ム水ニ溶ケズ氣ニ申レ  
バ黄色ト爲ル

酒酸全酸化瀕タルゲ  
ーラス、ヘイ  
ド

醋酸全酸化瀕液ニ酒酸ヲ點スレバ白粉晶ヲ生ズ

○拔答朮亞局方ニ載ル所ノ製法ニテハ精好ノ品  
ヲ得テ無ク亦晶ヲ結ハズ

酒酸銀タルゲ  
ントラス、ア

複親和ヲ以テ製ス白色ニメ溶ケズ氣ニ黑銹ス

酒酸安質タルト  
ラス、  
スチビキス



全酸化安質液ニ酒酸ヲ和スレバ方柱ヲ生ス溶ク  
易ク潮リ易シ

酒酸複鹽類

酒酸加里曹達

タルトラス、ポトリス、セキス、エトツ

ルポレイケリス、セキス、セイグチ、タルタ  
ルポレイケリス、セキス、セイグチ、タルタ

此鹽ハ千六百七十二年寛文十年佛蘭西羅攝而列府

ノ藥局布錫孤涅多者ノ偶得ニシテ五十餘年其家ノ

秘方タリシヲ傑臘弗魯伊暴爾儒苦ノ二賢絶世ノ

慧眼ヲ以テ燎然其秘ヲ披テ世ニ嘉惠セリト云

○製法ハ半炭酸曹達一比ヲ水六比ニ錫鍋ニ煮滾

沸ニ乗メ酒石細末少許宛加ヘ沸滓止ムヲ度トシ  
炭酸曹達一比ヲ加テ濾過シ又煮テ一滴ヲ鍍板上  
ニ點メ凝ルニ至リ又濾テ冷セバ晶ヲ結ブ但シ曹  
達少ク勝ハ晶形豊美ナリ

○晶芒ハ四面。六面。八面。或ハ十面ニシテ玲瓏ナル

冰ノ如シ鹹味邪惡ナラズ氣ニ中バ唯外面風化シ

煨ケバ自家ノ結晶水ニ溶化シ而後分離ス水一分

半。湯三分一ニ溶ク成分ハ加里曹達各一亞。酒酸二

亞即チ酒酸加里。酒酸曹達各一亞。水十亞ナリ

酒酸諸摸尼亞  
タルタムモニアカール、空イレンステーン



タルタルス、ソルビリス、獨ニス、所稱、和蘭所稱ハ酒酸加里ナリ

酒石ヲ煮溶シ炭酸諸摸尼亞ヲ加テ稍飽度ヲ過キ  
放冷スレバ方柱或ハ六面柱ヲ結ブ○味清涼ニメ  
舌ヲ刺シ氣ニ中レバ風化メ諸摸尼亞飛散ス水ニ  
分湯一分ニ溶ク成分ハ前鹽ト同シ但結晶水ノ分  
量詳ナラス

酒酸亞酸化鍍加里 タルトラス、五ルロヒス、エト、ポト、ルシキス

鍍屑一分ニ酒石四分ヲ加ヘ水煮スレバ水素發メ  
其鍍酸化シテ粉狀白鹽ト爲テ沈ム極テ水ニ溶ガ  
タク鍍味アリ氣ニ中レバ更ニ酸化メ黑色ト爲ル

酒酸全酸化鍍加里 タルトラス、五ルリキス、エト、ポト、ルシキス

鍍屑一分酒石四分ニ水ヲ加ヘ稀泥トシ温處ニ置  
テ時々攪動スレバ漸ク黑色ト爲ル試ニ取テ水ニ  
投スレバ大抵溶化スルヲ候セ多分ノ水ヲ加煮テ  
濾過シ其液ヲ文火ニ煮テ鹽トス○結晶セズ氣ニ  
潮リ水ニモ亞爾箇兒ニモ溶ケ鍍味甚シ○酒酸複  
鹽ハ都テ苛性若ハ炭酸加里ヲ以テ分離スト雖モ  
特リ此鹽ハ其鍍加里ニ由テ分離セズ此特異ノ一  
性、漆家ニ鴻益アリ漆工其理ニ達セズト雖モ試驗  
歳深メ自ラ妙致ヲ曉得シ硫酸鍍ヲ用ルニハ必ズ



酒石ヲ配互ス

酒酸亞酸化錫加里

タルトラス、スタインノ  
ス、エト、ポト、及びキス

錫屑或亞酸化錫ヲ酒石液ニ溶シ製ス○溶易ノ品

ヲ結ビガタシ前鹽ト同ク苛性炭酸ノ加里ニ由テ

分離セズ○漆家鹽酸錫ヲ使用スルニ酒石ヲ配ス

ルト多シ亦此鹽ヲ生セシムル理ニ默契ス

酒酸全酸化銅加里

タルトラス、キプリキ  
ス、エト、ポト、及びキス

暗青緑ノ品ニメ溶クベシ○水顔料ニ用ベシ此ハ

銅緑ヲ酒石ニ和シ溶シ溶液ヲ煎乾シ製ス

酒酸安質加里

タルトラス、スタ  
及びキス、タルトラス、ポト、及びサ

一、スチビア、五ム、  
ステリン、韃爾答律斯、  
ス、スチビキス、エト、ポト、及びサ

此製ハ墨印悉苦多ニ創リ後人陸續ノ日新發明

多シ特ニ亞爾瓦琢知散ヲ用ル法第二章ハ最モ

良法トスベシ近簡易ノ一法アリ費半ニメ功倍ス

安質没尼細末一比ニ水二分ヲ添ヘ之ヲ磁皿ニ煮

消酸一比許ニ半分ノ水ヲ加タルヲ取テ且加ヘ且

煮テ加了リ仍數時火上ニ置バ消酸安質ト爲テ硫

黄分ル於是其劑ニ多分ノ水ヲ注ケバ拔塞斯性ノ

消酸安質ト爲ル之ヲ屢々淋洗スベシ消酸ヲ除盡

サンガ爲ニ最後ノ淋水ニ炭酸加里少許ヲ溶スベ



シ而后洗淨セル酸化安質ニ酒石末一匕ヲ加ヘ水  
煮シテ瀝シ瀝液ヲ蒸散シ放冷シ結晶ヲ再ヒ煮テ  
晶ヲ結バシム

此鹽ハ從來或ハ晶ヲ結ヒ或ハ晶ヲ結バザル者ト  
シテ強テ結晶ヲ議セズ乾マデ蒸散セリ百回一回  
ノ如ク端晶ヲ爲テシカモ性質淨潔ナル者ヲ得ル  
法ハ實ニ今日ニ初レリ○按ニ從來船載ノ品ハ沙  
淡黄ノ粉ナリシガ  
六七年前ヨリ雪白ノ大晶ヲ爲ス者ヲ致ス此恐ク  
ハ爰ニ説ク所ノ新法ニ由テ製スル者ナルベシ効  
カモ亦從前ノ者ニ比  
ムレバ頗ル峻烈ナリ其晶潔白透明ニシテ稜角端正  
ナリ氣ヲ冒セバ稍曇暗スト雖モ風化ノ類レバ味

微甘邪惡ナリ勒佉母斯紙ヲ紅變ス水十五分湯二  
分ニ溶ク○甚タ稀薄ナラザル溶液ハ硫化水素ニ  
遇ヘバ所含ノ酸化安質盡ク安質没尼ト爲テ沈ミ  
硫消鹽ノ三酸ニ遇ヘバ拔塞斯鹽ト爲テ沈ミ苛性  
加里少許ヲ加レバ酸化沈ム加ルニ多ケレバ復タ  
溶解ス醋酸ハ特リ此鹽ト交渉没シ○成分ハ諸家  
ノ説一定セズ宛爾ハ貴斯多ハ最モ成分ノ詳攷ニ  
勞苦セシガ宛モ別爾ハ略ト兩意融會シテ百分ハ  
酸三八又六一加里二三又二六酸化安質四二又九  
九水五又一四即チ酸二亞加里一亞酸化安質三亞



水二亞トス

此外利知亞<sup>新元</sup>素名重土。加爾基。苦土。ノ複鹽アレ氏學

者ノ急務ニアラザルヲ以テ茲ニ略ス

佛蘭西方。酒酸加里蓬酸<sup>タルタリス、ケレモルタルタリ、</sup>

佛蘭西ニテ藥用トス

○製法ハ蓬酸一分ニ酒石四

分ヲ和シ水二十四分ニ溶シ蒸散ノ粘攪可捏<sup>キ</sup>ニ至

リ冷シテ堅キ塊トス○美酸味アリ結晶セズ氣ニ

潮リ水四分、三湯四分、一ニ溶ク亞爾箇兒ニ溶ケズ

○成分ハ酒酸加里蓬酸ナリ蓬酸ヲ拔塞ストス

獨乙和蘭方。酒酸加里蓬酸

名上ニ同シボラクス、タルタリサタ

製法ハ蓬酸曹達一分ニ酒石三分<sup>別法云</sup>ヲ和シ水

ニ溶シ暫ク靜定シテ澄ヲ取り蒸散シテ粘膠ノ物

トシ冷シテ堅塊トシ緊口壘子ニ貯フ○土鹽ト同

性ナリ但濕ヲ引テ更ニ甚シ是ヲ以テ所貯ノ壘塞

吸著メ抽キ取ベカラザルニ至ルテアリ○成分ハ

前鹽ト異ニ酒酸蓬酸加里曹達ノ四物ナリ如此

鹽ヲ世ニ學生鹽<sup>テ名ウリ</sup>ト稱ズ酸拔塞斯共ニ

二様ニノ二鹽雙生スルガ如クナレバナリ

附録

福傑先酸<sup>ホゲセル</sup>



蘓氏舍密ニ近容氏者坊間ニ酒酸ト稱シ鬻ク者ノ  
中一種異様ノ品アリ其酒酸始メ德巴爾多

德斯福斯傑斯ニテ製スル所ノ者ナルニ因

テ之ヲ福傑先酸ト名ク偃墨葬ハ葡萄酸ニドロイ

ンサウレト名ク○成分亞量共ニ酒酸ニ同シ稟

性モ亦大異無シ此果ノ一種ノ異酸ナル歟又何等

ノ法ヲ以テ此酸生スルヤ未タ詳ナラズ恐ハ酒酸

ヲ製スル異法ニ由テ生スル者ナラン

安息酸第二百七十七章

アシロム、ベンゾイキム、ベンスー  
シール、フロールス、ベンスー

安息酸ハ藥局ニテ安息香華ト稱シ安息香ヲ昇華法

ニテ華ト爲ス者ナリ酸性アリ

○合藥舍密云昇華法ハ安息香ノ焦油オレウム、ベ

マチキムヲ昇テ精好ノ華ヲ得難シ故ニ濕道ノ法

ヲ良トス其法安息香細末十六弓ニ結晶炭酸曹達

蘓氏舍密ニ炭酸加里三弓ヲ和シ水ヲ以テ稀泥ト

シ砂火ニテ手ヲ駐メ攪セ香ノ融ケザル火度ヲ

以テ煮一ニ時又水ヲ加ヘ濾シテ滓ヲ淋洗シ淋

汁ヲ本液ニ合シ煮テ一麻篤トシ放冷シ稀硫酸ヲ

加テ渣ヲ起シ渣生シ歇テ其渣ヲ水洗シテ沸湯ニ



溶之放冷スレハ白晶ヲ結ブ即チ此酸ナリ

○蘇氏舍密云安息酸ハ千五百六十年永祿三年華羅攝

爾魯安息香ヲ乾餾ノ創テ之ヲ得タリ當時ハ安息

酪ト呼做セリ爾後多ト昏ト穢ト會爾ト涅昇ト華法ヲ以テ輕

軟ニシテ光輝アル晶ヲ得テ之ヲ安息香華ト名ク濕

道製法ハ悉祛列ニ權輿ト來者愈益々其法ヲ修繕

シテ今日ノ全備ニ至レリ○此酸ハ翅ニ安息香ノ

ニナラズ拔爾撒摩ト露ト拔爾撒摩多露ト蘇合香ト蘇合

油ト沒藥ト桂ト莞香ト某トノ沫ト沫ト動類ニテハ童便ト食草ト獸

ノ尿中ニ在リ又酸素蘇魯林ト共ニ桂油ト苦扁桃油ト

等ニ在リ○布羸斯多ハ動物ノ某体ニ消酸ヲ加テ

此酸ヲ生スト謂ヘリ結列爾ハ獸脂ノ乾餾シ

ム、セバシキムト名ク別爾入略此酸ヲ試テ安息酸一箇分離シガタキ分ヲ兼ル者トセリ○精

好ノ安息酸ハ色白ク纖細ナル一繭絲ノ如ク柔軟

ニシテ撓屈スベク或ハ薄キ葉片晶ヲ爲ス香無ク味

微酸ニシテ舌ヲ刺ス若シ黄氣ヲ帶ヒ或ハ酸臭アル

者ハ純精ノ品ニアラス温レハ焔化シ冷レハ光芒

紋アル塊ヲ爲シ焔ケハ煙ト爲テ鼻目ヲ戟シ咳ヲ

發ス開器ニ熱ノ火ヲ點スレバ焔ヲ揚テ焚ユ○結

晶水無シ○炭素十五亞。水素六亞。酸素三亞。一亞ハ



百二十〇水二百分湯二十五分亞爾箇兒二分ニ溶  
ク又能ク亞的兒精油ニ溶ク〇拔塞斯ニ和メ安息  
酸鹽 ベンソフアス フ爲ス

安息酸曹達 ベンソフアス

針晶ヲ結ヒ氣ニ粉化ス味甘ノ刺戟シ水八分ニ溶  
ク亞爾箇兒ニ沸熱ト雖モ溶ケガタシ〇童便食草  
獸ノ尿中ニ在リ其獸尿ヲ煮テ三分ニトシ鹽酸ヲ  
點滴スレハ渣滓沈降ス沈渣ハ此酸ト尿酸ト和ス  
ル者ナリ惡臭アリ

安息酸諸摸尼亞 ベンソフアス

中性ノ者少シ拔塞斯勝ツキハ流動ス之ヲ蒸散ス  
レバ諸摸尼亞ノ一分飛散メ酸鹽ト爲ル〇水ニ溶  
ガタシ湯ニ溶シ冷セバ晶ヲ結ブ冷テ漸クナレバ  
羽毛ノ如ク急ナレバ粒晶ヲ爲テ中鹽酸鹽共ニ亞  
箇兒ニ溶ク

安息酸重土 ベンソフアス

針晶氣ニ變ゼズ水ニ漸ク溶ク

安息酸斯多倫土 ベンソフアス

前鹽ト同シ但氣ニ中テ光澤ヲ喪フ然レ粉化セズ

安息酸加爾基 カルキアス



瑩白光輝アル稜晶ヲ結ビ氣ニ粉化ス味甘ニアリ  
舌ヲ刺ス水二十分ニ溶ク

安息酸亞酸化滿俺ベンガノヒス

淨白ノ細柱或ハ薄片ヲ爲ス氣ニ變ゼズ水ハ二十  
分湯ハ少許亞爾箇兒ニ溶ク○此鹽ヲ乾留スレバ  
油ヲ滴ス其油ノ色香稀稠甚夕桂油ニ類ス但シ其  
安息酸精好ナラザレバ此油ト共ニ些ノ青酸出ツ

安息酸亞酸化鎂ベンロソアス

帶黃色ノ晶ナリ氣ニ粉化ス水亞爾箇兒ニ溶ク

安息酸全酸化鎂ベンルソアス

淡赤ノ粉ナリ水ニ溶ケズ斐聖業爾ノ説ニ沸湯ニ  
溶セバ酸鹽ト拔塞斯鹽ト二分レ酸鹽ハ結晶スト云

安息酸尼結爾ベンソアス

淡緑ノ葉片晶ヲ爲ス氣ニ粉化シ亞爾箇兒ニモ水  
ニモ溶ク

安息酸亞鉛ベンソアス

前鹽ニ同シ但針晶ヲ爲ス

安息酸鉛ベンソアス

光アル葉片ヲ爲シ水ニ溶ガタク氣ニ變ゼズ結晶  
水零三八四亞爾箇兒ニ溶ク○諳摸尼亞ヲ加レ然



拔塞斯鹽ヲ為ス此ハ溶ガタキ白粉ニシテ結晶水無

シ酸一亞拔塞斯三亞ニ成ル

安息酸亞酸化錫 ベレンツアス、ス  
タレノヒス

鹽酸錫液ニ安息酸曹達ヲ加レハ白粉ト為テ沈ム

湯ニ少シ溶ケ亞爾箇兒ニハ溶ケズ

安息酸蒼鉛 ベレンツアス、ビ  
シナキス

白キ針晶ナリ溶ケ易シ氣ニ變ゼズ亞爾箇兒ニハ

少ク溶ク

安息酸全酸化銅 ベレンツアス、  
キプリキス

暗緑ノ稜細晶水ニ溶難ク亞爾箇兒ニ溶ケズ

安息酸亞酸化瀕 ベレンツアス、ヒド  
ラルゲロヒス

白粉甚タ溶ガタシ昇華ノ白キ羽毛晶ヲ為ス

安息酸全酸化瀕 ベレンツアス、ヒド  
ラルゲロヒス

水ニモ亞爾箇兒ニモ溶ク煎シテ結晶セズ唯粉狀

ト為ルノミ中等ノ熱ニテ羽毛ノ如キ晶ヲ昇ス火

度甚ケレバ分離ス

安息酸銀 ベレンツアス、ア  
ルゲンチキス

白粉ナリ消酸銀液ニ安息酸加里或ハ安息酸曹達

ヲ和スレバ複親和ヲ以テ之ヲ生ズ日光ニ中レバ赭

色ト為ル湯ニ溶ケ冷レバ粉ト為テ沈ム亞爾箇兒







ユレバ中鹽ト爲テ試藥醫方ノ用ニ堪ヘズ故ニ修  
 酸液モ加里涵モ醇厚ナル者ヲ和シテ澱生シ歇ム  
 ヲ正鵠トシ加里ヲ加ヘ過ザラシム○短キ方柱暗  
 晶ヲ爲ス氣ニ變ゼズ水ニ溶易カラズ燒酒十四分  
 ニ溶ク煨ケバ烺化シ膨脹メ酸煙ヲ發シ炭酸加里  
 残ル○成分ハ加里一亞。修酸二亞。  
 中性修酸加里 ヒトリン グレ、ポトアス  
 酸性修酸加里ニ炭酸加里ヲ和シ製ス○柱晶ニシ  
 水ニ溶易シ煨ケバ炭酸加里残ル○攝律刺斯曰安  
 質没尼平對量ヲ加テ煨ケバ安質加里ト爲ル

四複修酸加里 多ドリ、オキサス、ポト、ヒト、ル、ロ、ワ、ペ、ル、ド、ヒ、ト、ヒ、ヒ、ト  
レ、ポ、ト、ア、ス

酸性修酸加里ニ消酸ヲ加レバ之ヲ生ス尋常ノ修  
 鹽自ラ此ヲ雜ルヨアリ針晶ヲ結ビ前鹽ヨリ溶ケ  
 カタシ○成分ハ加里一亞。修酸四亞。

固油第二百七十九章

オレ、ウム、エキ、ス、プ、ラ、サ、搾、油  
ゲ、ペ、ル、ス、テ、オ、ー、リ、ー  
 固油ハ阿利襪。南杏。北杏。亞麻子ノ類ヲ搾テ取ル油ナ  
 リ多クハ粘液ヲ雜テ水。亞爾箇兒ト和性無シ

○葛氏曰固油ハ無味無臭ナリ肉豆蔻。老利兒等ノ



搾油ニ其氣味有ルガ如キハ精油ヲ雜ルガ故ナリ  
 色モ淨白或ハ微黄ヲ常トス若シ深黄或ハ綠色ナ  
 ルハ亦精油ヲ挾ムト知ベシ新鮮ノ固油ハ亞爾箇  
 兒ニ和セズ苛敗スル者ハ稍和性ヲ生ス沸湯ノ熱  
 度ヲ以テ揮散セズ故ニ蒸餾スルノ能ハズ○固油  
 ニ粘液或ハ蘆膜ヲ加レバ能ク水ニ和ス之ヲ植酪  
 又粵繆爾西阿ト稱ス○固油ノ成分モ亦水炭酸ノ  
 三素ナリ或云水素二十一  
分炭素七十分油ニ火ヲ點メ焚ルハ水  
 素ノ焚ルニノ酸素其焚燒ヲ助ルナリ而シテ其炭素  
 ハ游離シ凝テ煤ト爲ル即チ煎油ノ鍋中火ヲ引テ

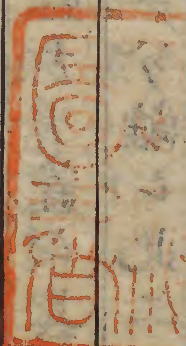
發燒スル片之ヲ救トトシテ卒ニ水ヲ投スレバ火  
 焰愈益ク熾盛ナリ蓋シ其水焚油ノ甚熱ニ由テ水  
 酸ノ二瓦斯ニ分離シ此二瓦斯カヲ併セテ其焚勢  
 ヲ扶クルガ故ナリ

○固油ヲ久ク貯レバ敗テ辛酸ノ味ヲ生シ渾濁ノ  
 臭氣ヲ生ス之ヲ苛敗又做蘇ト謂ヒ藥用餌食共ニ  
 害アリ苛敗ハ油性ニ從テ遲速アリ胡桃油亞麻油  
 ハ苛敗最速ニ算麻油ハ最遲キガ如シ苛敗ノ由テ  
 生スル所以ハ炭酸ヲ脱スルニ在リ而シテ其炭酸ヲ  
 脱スル所以ハ其油大氣ヲ受テ自ラ發酵スルニ由





リ油大氣ヲ受テ自ラ發酵スルハ油中ニ粘分アル  
 ニ由ル故ニ炭酸ヲ發スル法術ヲ設テ以テ其苛敗  
 ヲ防クベシ譬バ過酸硫酸礬土加ク里ニ炭酸加爾  
 基ヲ水ニ和シ海綿ニ蘸シテ油桶ノ底ニ置キ或ハ  
 業已ニ苛敗セル油ニハ甘味ノ課<sup>ス</sup>減ノ搗爛ノ油ノ  
 十分一量ヲ和スレバ果汁發酵シテ炭酸瓦斯ヲ發  
 シ敗油之ヲ稟テ本性ニ復ス



舍密開宗内篇卷十七終



